

日本はバブル崩壊後、「失われた20年」とも言われる経済の低迷に落ち込んでいる。この行き詰まりは幕末期にそっくりだ。これに対して、明治維新後の近代化を推し進めた実業家たちは、国家建設から人の生き方まで、どんな哲学を残したのか。今回は、第一国立銀行を設立するなど「近代日本の資本主義の父」と呼ばれた渋沢栄一を、玄孫の健氏が語る。

渋沢栄一がつくった家訓は、栄一の死後も、親族が集まる正月の「渋沢同族会」で、新年のあいさつとともに読まれてきたといえます。わたしが生まれるちょっと前に同族会がなくなくなり、わたし自身も小学2年から大学までアメリカで育ったので、この間は家訓に触れる機会がありませんでした。家訓を詳しく調べてみると考えたのは、2001年に自分の会社を起こしたのがきっかけですね。

と、叔父がよく突っついてきたからです。家訓に「政治と株はやっちゃいかん」と書いてあるのを知っているか、と。わたしが投資銀行やヘッジファンドに勤めているのを知っていたので、そう言ったのでしよう。この部分、正しくは、「荷毛投機ノ業又ハ道徳上賤ムヘキ務ニ従事スヘカラス」ですが、たしかにわたしの仕事は安いところで買っ

て高いところで売る、というのを繰り返すものですか。そこで、これを出発点に、栄一が本当は何を考えていたのか、研究を始めました。実家に行き、書庫からほこりをかぶった家訓や家法などの資料刊行物を引っ張り出したのです。家訓は栄一によって1891（明治24）年につくられ、「処世」「修身」「子弟教育」といった章立てになっている。そのなか

ら、投機といえば投機です。べつに卑しい仕事をしていくつもりはないものの、わたしにとっては「不都合な真実」に直面してしまっただけです。そこで、これを出発点に、栄一が本当は何を考えていたのか、研究を始めました。実家に行き、書庫からほこりをかぶった家訓や家法などの資料刊行物を引っ張り出したのです。家訓は栄一によって1891（明治24）年につくられ、「処世」「修身」「子弟教育」といった章立てになっている。そのなか

あっても、使えるメッセージがたくさんあるとわかりました。そもそも、栄一が生きた時代と現代には共通点があるんです。それは「沈滞」であり「閉塞」です。明治時代には欧米の列強にのみ込まれてしまう危機感が当然あったと思います。「自分がやらなくて、だれがやる」という当事者意識を持った人たちがたくさんいて、素早くさまざまなことを決断していったのでしよう。大正時代に入ると、状況が変わったようです。「大正デモクラシー」という言葉も残っているように日本が豊かになった時期だと思っ

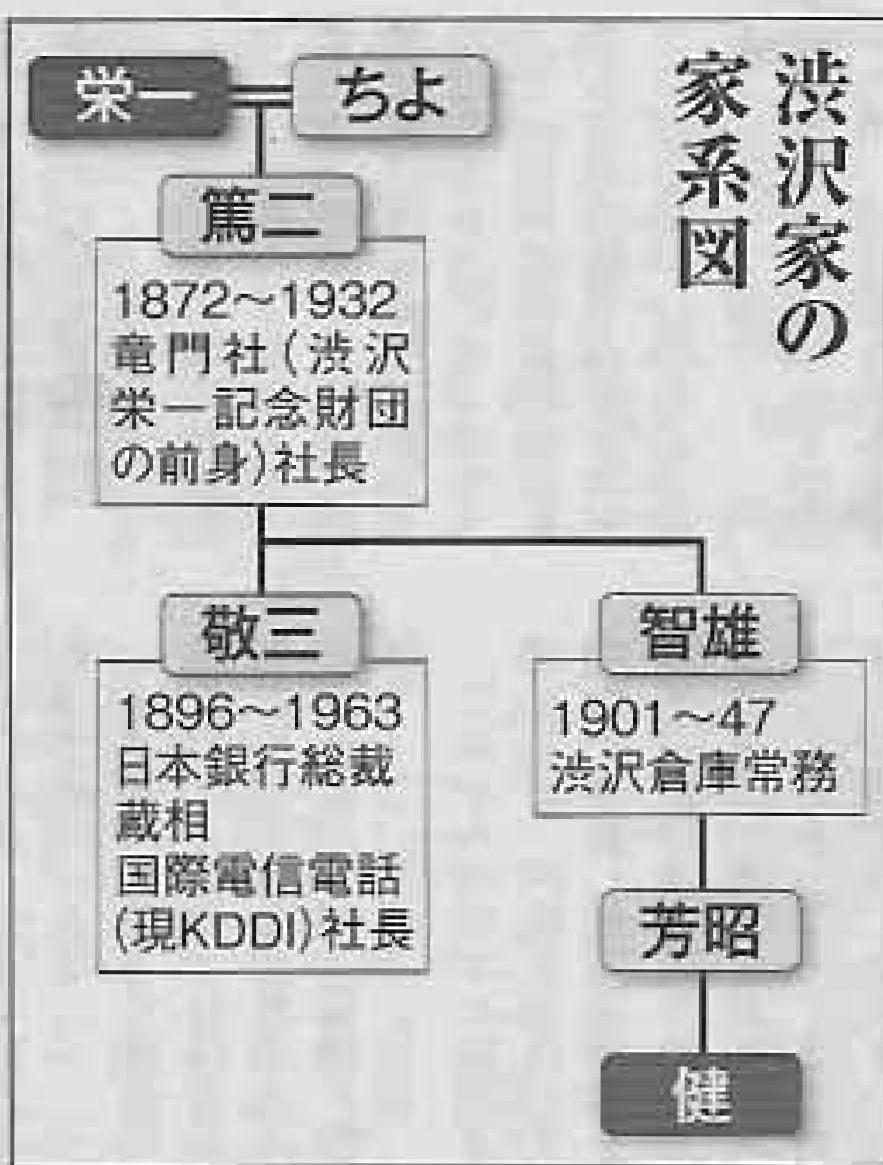
明治の実業家に学ぶ

渋沢栄一の家訓が伝える

国を元気にする方法



しぶさわ・えいち (1840~1931) 蘆花や藍玉の製造販売も手がける裕福な農家に生まれる。一橋慶喜(後の江戸幕府15代将軍・徳川慶喜)に仕え、幕臣としてパリ万国博に派遣される。明治維新後は民部省改正掛掛長として貨幣や銀行の制度の調査立案を手がけた。退官したのち、第一国立銀行(現みずほ銀行)、王子製紙、東京海上保険(現東京海上日動火災保険)、日本鉄道(現JR東日本)をはじめ約500社の設立にかかわった



にまわすだけでしよう。個人も仕事などで、「ちよっと考えてみよう」と、よく言いますよね。いま決断したくないからです。やはり当事者意識に欠けています。こうした伸び悩みの打開に向けて、栄一が訴えたのは明治維新以来、(多数の事業は非常なる元氣と精力をもって発展してきた) (論語と算盤) という時流の再現だった。(実業家はもちろん、一般国民は大いに元氣振興に力を用い、もって国運の発展に資せなければならぬ) (青淵百話) ということです。一般国民の「元氣」とは何でしょうか。家訓では、(富貴ニ驕ルヘカラス、貧賤ヲ患フヘカラス、唯々智識ヲ磨キ、德行ヲ修メテ、真誠ノ幸福ヲ期スヘシ) と掲げています。人はそれぞれ能力があり、

ていきましたが、栄一は有名な著作『論語と算盤』で、(一般が保守退嬰の風に傾いておる) (健氏による口語訳。以下同) と嘆いています。当事者意識が薄くなり、何かあると、すぐ政府を頼りにする「政府万能主義」に陥った。守りの姿勢に入ってしまったわけですね。

ていきました。(社会の上下一般に元氣が消沈して、諸般の発達すべき事柄が著しく停滞して来たようである。(中略) その日その日を無事に過ごさずえすればそれでよいという順行のあるのは、国家社会にとっても、もっとも痛嘆すべき現状ではあるまいか) (著作「青淵百話」)

明治時代も成功しすぎてしまったのでしよう。日露戦争に勝った後であれば、なおさら西洋社会に追いついたと考えてしまっても不思議ではありません。

人間は進歩がないというのか、歴史は繰り返すというのか、いまも同じ状況に陥っています。昭和の中期は高度成長をしましたが、バブルが崩壊してから日本は「どうしちゃったの?」という停滞が10年、20年と続いていますよね。

いまだ日本の最大の病は「先送り」です。普天間基地の移転問題もそうですし、国の莫大な借金もツケを後

こうした風潮に対して、栄一は深刻な危機感を抱い

成功は次のステージに進む際の最大の障害ですが、

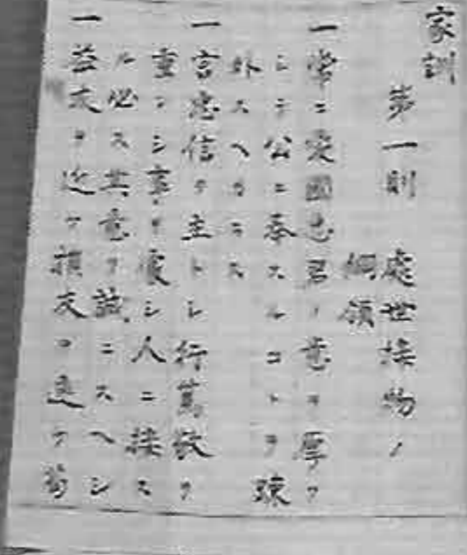
問題は「先送り」

問題の「先送り」

問題の「先送り」

右ページの写真は栄一直筆の「家法」。1915(大正4)年に改訂されたもので、渋沢家の同族の範囲や、栄一の一家を「宗家」と呼ぶことなどを定めてある(写真の「家訓」と「家法」は渋沢史料館所蔵)

「家訓」の最初の条文は〈常ニ愛国忠君ノ意ヲ厚フシテ公ニ奉スルコトヲ疎外スヘカラス〉



その能力を最大限発揮できるように仕事を分担すれば、理想の社会が築ける。だから元気を出して切磋琢磨しなさい、というわけです。つまり、能力主義の社会を求めたのです。

わたしは当初、栄一がめざしたのは「優しい資本主義」だという印象を持っていました。栄一といえば、中国の思想家・孔子の言動をまとめた「論語」を基盤とする経済、すなわち「道徳経済合一説」を唱えていたからです。

しかし、『論語と算盤』をよく読んでみると、実は厳しい。あらかじめ論語に基

づいたルールが定めてあつて、そのとおりに行動しなさい、というのではないからです。まず自分が、論語に記されたような道徳規範に沿って自立し、周囲のこ

ともよく考えて能動的にふるまいなさい、と求めています。

個々人の能力向上が国の元気の底辺にあるなら、実業家は何をすれば停滞を抜け出せるのでしょうか。

それこそ、「論語と算盤」です。論語が「道徳」だとして、算盤が「経済」だとすると、企業や社会をいい状態で長続きさせるには両方が必要だということです。

〈正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができない。ここに

おいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめる事が今日の緊要の務め〉

（論語と算盤）

そろばん勘定がうまくなれば、とくに企業は続かないでしょう。

道徳については、

〈仮に一個人のみ大富豪になつても、社会の多数が貧困に陥るような事業であつたならば、どんなものであろうが、いかにその人が富を積んでも、その幸福は継続されない〉（同）

こうした道徳観が商売に植え付けられていないと周囲から信頼されないし、事業が拡大できない。ひいては国が元気になれない。

国の成長の根源は民間の力だということです。

健氏は01年にコンサルティング会社シブサワ・アンド・カンパニー、07年に投資信託の運用会社コモンズ

栄一を引き継ぎ大河つくる役割

健氏は01年にコンサルティング会社シブサワ・アンド・カンパニー、07年に投資信託の運用会社コモンズ

投資を立ち上げた。コモンズでは30年間の長期投資をするのが特徴で、健氏は「気づいたら栄一と同じことをしていた」と言う。

栄一は、設立にたずさわった第一国立銀行で株主を募集する際に、こう訴えています。

〈銀行は大きな河のような

ものだ。銀行に集まってこない金は、溝にたまっていく水やポタポタ垂れている滴と変わりない。せつかく人を利し国を富ませる能力があつても、その効果はあらわれない〉

資本主義に対する栄一の期待は、ここにあつたと思

います。あちこちに散らばった資本や能力などが寄り集まってくれば、そこで大河になり、国の発展の原動力になるといふのです。

もちろん、お金を集めるだけではいけません。〈よく集めて散じて社会を

活発にし、従つて経済界の進歩を促すのは有為の人の心がけること〉（論語と算盤）

これからの日本の成長を考えると、団塊の世代の人たちが退職して人生の第2ステージに入るときに、お金をちよつと賢く使つてみようとなれば、「小さな資本」が世の中に創出されま

す。何か共感するものにお金が流れるようになれば、滴が大河になることがあり

得るのではないでしょう。そこで、日本にひとつ足りないのは長期投資の資本じゃないかと考えたのです。

コモンズがめざす投資期間は30年間ですが、これは新入社員が社長になるぐらいの時間です。そういう資本を供給できるのであれば、株主として一方的にも申すのではなく、経営者と同じ士俵に立つて建設的に対話できると考えました。「30年後には自分がいない」と

思う人でも、そのとき自分にとつて大切なだれかが幸せに暮らしてほしいと願う

ものです。その人のために、ちよつとだけ投資してみませんか、ということ

です。 渋沢栄一が銀行をつくつたのは、日本の経済力の土台になるからです。いまは銀行が集めたお金が動かなくなつたので、滴を集めて大河にする役割を引き継げればと思つています。

栄一のやり方を実践すれば、日本は、国も人も再び元気になるはず

です。

構成 本誌・江島俊彦

次回

は安田善次郎

です。

2010.1.29

112